

# 弓箭についてー合戦と儀礼とで考える

文19-0660宮本紗衣



東京国立博物館 画像検索, 『後三年合戦絵詞』, (画像番号 C0021050) ,<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0021050>, (2023年2月27日閲覧)

元画像を保存後、トリミングしています。

# 目次

- ・要旨
- ・武器としての機能(一)
- ・武器としての機能(二)
- ・神仏への信仰を含む精神性(一)
- ・神仏への信仰を含む精神性(二)
- ・神仏への信仰を含む精神性(三)
- ・まとめ

# 要旨

武士を象徴する武器は弓箭だった。合戦時において最も殺傷力の高い武器として用いられていた。また、その殺傷力の強さから人々に恐れをも感じさせた。弓箭は、神仏の意思を伝える武器として、呪術的な特性をも備えるに至る。本発表は日本の軍記物語・説話集・日記・絵巻物等を資料として、以下の二点について考察する。

## 一、武器としての機能

- 距離の利点
- 貫通力の高さ
- 異物による攻撃
- 攻撃の持続性

## 二、呪術的特性

- 儀礼における弓の扱い
- 自身の弓道経験

# 武器としての機能(一)

■ 距離の利点 → **離れた場所から動きのある相手に致命傷を与える。**

「二段ばかり遣り過し、(中略)思ふ矢束を引き渡し、しばし持堪へてひやうど射る。」(『曾我物語』第一卷「祐通、八幡三郎に射落とされる」)

→ 離れた場所からの適切な行射により的中率・殺傷力が高まる。

「鹿どもの、その数多く出で来たるを、思ひ思ひに射取る有様」(『曾我物語』第六卷 十一 「三原の狩を終え、上野国へ入る」)

■ 貫徹力 → **熊や金属製の鎧をも射抜く貫徹力がある。**

「ひやうど射る。熊は右の肋骨を懸けず、づんど射通して、矢は柏木にしたたかにぞ立つたりける」(『曾我物語』第一卷 九 「伊豆、奥野の狩り、山内、熊を射る」)

「金交り三領を木の枝に懸けて射通したりぞかし。」(『保元物語』中巻「白河殿へ義朝夜討に寄せらるる事」)

# 武器としての機能(二)

## ■異物による攻撃→**鏃が体内に残りダメージを与える**

押し直して矢を抜きければ、矢柄ばかりは抜けたけれども、矢の根は腰骨にぞ留まりける。(中略)はね木をもつて是非なく抜きけるに、肉付きて出でければ、終に空しく消え入りぬ。(『曾我物語』第二卷二 「河津祐通死す 父祐親の悲しみ」)

## ■攻撃の持続性→**替えの弓・弦・矢がある限り攻撃できる**

内より散々に射けるあひだ、前の堀一つ、寄手の勢にて埋もれける。されども寄手いよいよ増して、遅れ馳せの兵どもも喚きて馳せ重なりけるあひだ、内にも矢種尽きければ、八人、枕を並べて討たれけり。(『曾我物語』第二卷 七 「伊東祐親、大見・八幡を討つ」)

→矢が尽きたで敗戦したが、矢が尽きるまでは優勢であった。

# 神仏への信仰を含む精神性(一)

## ■ 儀礼における弓の扱い

・ 鳴弦 → 弦を打ち鳴らすことにより敵を威嚇・魔を祓う。

「『御客人を設け参らせたるぞ。御用心と覚え候。今宵は寝られ候ふな。御宿直よくよく仕れ』と言ひければ、『承り候ひぬ』とて、暮目の音、弓の弦打ちしてぞ御宿直しける。」(『義経記』第二卷 「伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事」)

「御湯殿の儀式有様など、蔵人の五位よきかぎり二十人、弦打に奉らせたまふ。」(『栄花物語』第三十八卷 松のしづえ「基子、実仁親王を産む」)

・ 追儺 → 声や鼓の音・弓矢を持って駆け回ることによって悪鬼を祓う。

「『儺やらふ儺やらふ』と騒ぎののしるを」(『蜻蛉日記』中巻 二十六 「しめやかな人生勸照、中巻の結尾」)

儺声をあげる方相を先頭に、桃弓・葦矢をもった群臣が声をあげながら内裏を駆け巡ると大日方氏は指摘している。

# 神仏への信仰を含む精神性(二)

## ■ 儀礼における弓の扱い

・ 祈禱 → 調伏祈禱で鏑矢を放ち、戦では神鏑が的中する。

「八大尊官は神の鏑を賊の方に放つ。」(『将門記』 十九「朝廷、将門調伏祈禱」)

「新皇は暗に神鏑に中りて、終に涿鹿の野に戦ひて、独り蚩尤の地に滅びぬ。」 (『将門記』 二十三「将門、北山に亡ぶ」)

→ 射手から離れて目標に的中する特徴から、人々の念や神仏の意志を矢に乗せていると解釈。

## ■ 自身の弓道経験

私が全国二位になった試合において、「今日は中る」と予感したり、的中させるために必要な事項を予見した。また、台風により中止も検討されていたが、競技時間のみ雨風が止み、試合が開催された。

→ 実力を出し切る精神状態・技術により得た結果。悪天候をも回避する見えざる力の発動。

# 神仏への信仰を含む精神性(三)

## ■自身の弓道経験

- ・精神状態→**射手の心境が弓箭に投影される。**

苛立ちや焦り等があると外れる確率が高く、落ち着きや自信があると中る確率が高い。射手の感情は矢飛び・矢所に現れる。

- ・技術→**射手の技術と鍛錬で得た経験が弓箭に投影される。**

射手が鍛錬して身に着けた技術・勘が矢飛び・矢所に現れる。弓道は繰り返し練習していく中で中る感覚を覚える。外す感覚ならば修正し的中させる。

- ・悪天候の回避→**見えざる者の力が働く。**

然れども私の方には法なし。公の方には天有り。(中略)桑の弓は快く挽かれ、蓬の矢は直く中る。(『将門記』二十一 「押領使藤原秀郷、登場」)

# まとめ

武士を象徴する武器は弓箭だった。弓箭の実戦における武器の機能が高かったからである。また、武威への恐れから弓箭に靈験があるとされた。儀礼での弓の扱いと、私の弓道経験から、離れた場所に矢を飛という特徴が、弓箭に神仏が宿ると考えられていたと結論付けた。刀剣や槍は対象に突き刺さる瞬間まで攻撃を加える人の姿が見えるが、弓箭は的中する瞬間に攻撃を加える人の姿が見えない。そのため、放たれた矢が意志をもって的中する、もしくは射手以外の存在の意志が矢に宿って的中すると捉えられていたのではないだろうか。また弓道においても、精神状態と技術とが矢飛び・矢所に影響する。弓箭は射手の精神と技術とを投影するものだと考える。